

後に関する
さい
m

コロナ禍の通所介護

上 6

サービス継続 試行錯誤

新型コロナウイルスの流行が続く中、デイサービスやデイケアといった通所型事業所が、いかに切れ目なく介護サービスを提供できるかが課題となっている。高齢者はリハビリなどを受けられなくなる、身体機能が衰え、以前の日常生活に戻れなくなることもある。介護サービス継続に向けた取り組みを2回にわたって紹介する。



介護福祉士（左）と一緒に、椅子から立ち上がる運動に取り組む女性（大田区通所介護事業者連絡会提供）

在宅の運動 冊子でサポート

緊急事態宣言中の5月、東京都大田区の女性(91)は、自宅で足腰の筋力を維持するトレーニングに励んでいた。介護福祉士の指導を受け、椅子に座った状態からテーブルに両手をつけて立ち上がる動作を繰り返す。卓上にある冊子「自宅でできるデイサービス運動プログラム編」で紹介されている運動だ。

通所型事業所の休業や利用自粛で、リハビリなどができなくなった利用者の身体機能が悪化することを示すデータがある。日本デイサービス協会（東京）と京大の研究グループは共同で、短時間デイサービス利用者と、2〜6月に1週間以上、デ

れ、自宅で運動を続けられるようになった。

女性の長女(59)は「母は楽しそうに体を動かしていた。デイサービスは再開されたが、またいつ影響を受けるかわからない。冊子を使って自宅で運動を続けられるのは心強い」と笑顔を見せた。

冊子作りを企画したのは、大田区通所介護事業者連絡会（約130事業所加盟）。全国的に感染が拡大した4月、区内でも事業所の臨時休業や利用自粛が相次いだ。「切れ目のないサービスを提供するためにできることはないか」と、都理療法士協会の協力を得て冊子を作成した。

写真がふんだんに使われた冊子では、歩行や嚥下などの身体機能を維持する体操や、発声訓練の方法など、約80種類を紹介している。約300部を印刷し、4月下旬から約

「デイ」欠席で身体機能低下

介護度高いほど顕著
イサービスを欠席したことがある約740人について調査。日常生活の様々な動作を点数化し、昨年9月、今年2月の結果と比較して、欠席前後の身体機能の変化を調べた。

上り下りは14・7%、「車椅子からベッドへの移乗」は8・9%、「着替え」は5・2%、それぞれ数値が悪化していた。

京大など調査

ど、悪化する傾向が見られた。サービスの休止は、利用者の命と健康にかかわる重大な問題。調査結果を踏まえ、行政や研究機関の協力を得てサービス継続に向けた対策を講じたい」と話している。

家族負担考慮 「利用再開」にも対応

40事業所が利用者に配布して活用してきた。

「運動プログラム編」に続き、紙を使った作業を紹介する「レクリエーション編」、クイズやクロスワードパズルなどを収録した「脳トレ編」も作成し、希望する事業所に配布している。区外の事業者などからの問い合わせもあり、実費で提供している。

同連絡会副会長の松橋良さん(36)は「在宅でも体を動かす機会を守りたかった。再び、休業や利用自粛が相次ぐ事態になっても、最低限のトレーニングができる仕組みを模索していく」と語る。

通所型事業所の休業や利用自粛は、自宅で介護する家族の負担増を招いた。その結果、いったん利用を止めたものの、再び通所したいというケースが出てきた。

都内のあるデイケア事業所では、緊急事態宣言が発令され、利用自粛が広がると、介護報酬の収入が激減した。4、5月の損失は計約800万円に上ったが、それでもギリギリの状態です。サービスを継続した。利用を控えていた人が、再開を希望するケースが相次いでいたためだ。この事業所の幹部は「重度の利用者ほど、家族では面倒を見切れなくなっていた」と振り返る。

5月25日に緊急事態宣言が全面解除されてからは、利用者が戻り、休業中の他事業所の利用者を受け入れるなどして、経営は持ち直した。それでも幹部は「再び感染が拡大し、利用自粛が増えて、損失を出さざるを得なくなる恐れはある。それでもサービスを続けられるかどうかは、実際のところ厳しい」と不安を口にした。

短時間デイサービス 日本デイサービス協会によると、比較的短い時間で、主にリハビリや体操などの機能訓練に絞ったサービスを提供する。通常のデイサービスでは、午前9時から午後5時の間に、食事や入浴、レクリエーションなども行う。